

(一) 作家の生涯

中原は明治四〇年（二七七）に山口県に生まれ、昭和一二年に鎌倉に没した。つまり彼は、地方に生をうけ、生涯を都会に閉じたという点で、近代日本の故郷喪失者の一員に名を連ね、その幼少年期の大方を大正教養主義の旋風下に置き、青春期のすべてを近代の（転形期）の上に晒したという点で、昭和詩人の典型『宿命』を生きた。或いは、三十年の短い生涯を終始（家）の庇護下に甘んじた、文学的『蕩児』の典型でもある。彼にとって、早熟とデカダンツは詩の土俵であり、ダダイズムは格好な実践のマニユアルとなった。それをキリスト教的な倫理感覚で内面化し、更に思想化し、単彩に抒情化したところに、希有な「へうた」の発現があつたようだ。昭和という「へうた」の困難な時代に、唯一「へうた」うことをもつて詩人の使命を全うし得たのが、中原という天才である。中原には「『これが手だ』と、『手』といふ名辞を口にする前に感じられてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい」（『芸術論覚え書』）というキーノートがあるが、これは、表現というものが言葉を要請する以前の、いわば表出の原点に立ち返ろうとする根強い志向性を物語っており、彼の考える詩＝芸術が、あくまで共同性を基盤とする「へうた」にあり、闇雲に個性や独創を珍重する近代的なそれとは大いに異なっていることを証している。その点、風土性を匂わせながら『四季』派の自然観に似ず、やはり、『歷程』派的な（根源への欲求）を日常性の中に抱え込んだ、無垢・純派な抒情詩人と呼んでおくべきだろう。（年譜を参照のこと！）

(二) 作品の評価

中原には、意匠的にまとめられた詩集としては『山羊の歌』（昭9・12）と『在りし日の歌』（昭13・4）の二つしかなく、それゆえ、『山羊の歌』の評価史を要約することは、中原に関するすべての研究の過半を約めるようなものである。したがって、作品個々への具体的な言及（評価や分析）は（六）に譲り、ここでは、研究の手引きとなるべく、とりわけ重要と目される文献をのみ列挙しておく。（研究史を眺望したければ、中村稔著『中原中也像のなりたち』（『中原中也全集』別巻昭46、角川書店）、吉田熙生編『鑑賞日本現代文学20 中原中也』（昭56、角川書店）の「中原中也研究案内」、長野隆編『日本文学研究資料新集28 中原中也』（平4、有精堂）の「解説」などを参考にするとよい。）

同時代評としては、小林秀雄の「中原中也の『山羊の歌』」（『文学界』昭10・1）その他、草野心平の「『山羊の歌』とその著者」（昭10・4、『四季』）などがあり、本格的な論考としては、大岡信の「中原中也と歌」（『ユリイカ』昭31・11、改題「宿命的なうた」『文芸読本 中原中也』河出書房新社所収）、北川透の「中原中也の世界」（昭43、紀伊国屋新書）や「中原中也が展開」（昭52、国文社）、中村稔の「中也のうた」（昭45、社会思想社）や「中原中也論」（『ユリイカ』昭47・10）、佐々木幹郎の「中原中也」（昭63、筑摩書房）などが見逃せない。又、吉田熙生の前掲書その他や、大岡昇平の「朝の歌 中原中也伝」（昭33、角川書店）その他の著述が必携文献であるのは、改めて言うまでもない。

(三) 作家年譜

明治四〇年(一九〇七) 一歳。四月二九日、山口県吉敷郡山口町大字下字野令^{しやうりやう}第三百四十番屋敷(現山口市湯田温泉一丁目十一番二十三号)に、六人兄弟の長男として生れる。父謙助は当時軍医として旅順に駐屯していた。

大正三年(一九一四) 八歳。父の朝鮮への赴任を機に、母福らと共に山口に帰り、四月、下字野小学校に入学。

大正四年(一九一五) 九歳。弟(次男)亜郎^{あろう}が病没。

大正六年(一九一七) 十一歳。謙助帰朝し、湯田医院を継ぐ。

大正七年(一九一八) 十二歳。山口師範附属小学校に転校。

大正九年(一九二〇) 十四歳。四月、山口中学校に十二番の成績で入学するが、読書や歌作に耽り、学業を怠る。

大正一一年(一九二二) 十六歳。共著歌集『末黒野^{しんくろの}』を刊行。

大正一二年(一九二三) 十七歳。三月、落第。四月、京都の立

命館中学に転校。秋、高橋新吉の『ダダリスト新吉の詩』に感激。この年の末、表現座の大部屋女優長谷川泰子と知る。

大正一三年(一九二四) 十八歳。四月、長谷川泰子と同棲。七

月、一月、京都に来た富永太郎と親交を結ぶ。

大正一四年(一九二五) 十九歳。泰子と共に上京。四月、小林

秀雄と知る。十一月、富永病没。泰子が小林の許へ去る。

大正一五年(一九二六) 二十歳。四月、日本大学予科に入学。

五、八月、『朝の歌』成る。九月、日大を退学。

昭和三年(一九二八) 二十二歳。三月、大岡昇平と知る。五

月、父謙助病没。小林は泰子と別れる

昭和四年(一九二九) 二十三歳。河上徹太郎や大岡らと『白痴

群』を創刊。一、四号(一、二、三月)に『寒い夜の自我像』その他を発表。『生活者』に『悲しき朝』その他を発表。

昭和五年(一九三〇) 二十四歳。『白痴群』五、六号(一、二月)に『みちこ』『盲目の秋』他を発表し、同誌は廃刊となる。

昭和六年(一九三一) 二十五歳。二、三月、『羊の歌』。四月、東京外国語学校専修科仏語部入学。九月、弟拾三^{しゅうさん}病没。

昭和七年(一九三二) 二十六歳。二月、『憔悴』成る。九月、『山羊の歌』の印刷にかかるが資金足らず、紙型のみ保存。

昭和八年(一九三三) 二十七歳。三月、外語専修科を修了。七月、『四季』に『帰郷』『少年時』などを発表。『紀元』の同

人となり、創刊号(九月)以降約一年間、『山羊の歌』の一部を発表。十二月、上野孝子と結婚。

昭和九年(一九四〇) 二十八歳。十月、長男文也^{ふみよ}誕生。十二月、『山羊の歌』を文園堂より刊行。

昭和一〇年(一九四一) 二十九歳。『歷程』『四季』の同人となる。多くの詩やエッセイが主要誌に掲載される。

昭和一一年(一九四二) 三十歳。詩作旺盛。各誌面を賑わす。六月、『ランボオ詩抄』(山本書店)刊行。十一月、文也病

死、衝撃を受ける。十二月、次男愛雅^{あひあ}誕生。神経衰弱弱昂ず。

昭和一二一年(一九四三) 三十一歳。一月、千葉寺療養所に入院。二月、退院。帰郷を決意。九月、『ランボオ詩集』(野田書

房)刊行。『在りし日の歌』の編集を了え、小林に託す。十月、発病し、二十二日、鎌倉にて永眠。病名は結核性脳膜炎。

昭和一三年(一九四四) 一月、愛雅病没。四月、『在りし日の歌』が創元社より刊行された。

(四) 作品解説

昭和九年（一九三四年）二月一日、文圃堂より刊行。（但し、編纂に着手し、それを終え、活字に組んだのは、昭和七年。）四六倍判、本文一四五頁、収録詩篇四四篇。装丁・題簽^{びんせん}―高村光太郎。限定二〇〇部発行。頒価―三円五〇銭。【初期詩篇】「少年時」「みちこ」「秋」「羊の歌」の五部構成より成る。

【初期詩篇】には、主に大正一三年―昭和二年に成立した二三篇の詩が収められ、昭和二、三年頃に私的に編纂を企図したが実現しなかった〈処女詩集〉の面影を見ることが出来る。ここでは、その中の四篇（「サーカス」―「悲しき朝」）を収録。「出発期にふさわしく、「気分」という中原の自己に對する関わり方と「愛」という他者に對する関わり方が萌芽の形で重なり合いながら、さまざまな技法的な試みとともに示されている」（吉田熙生『鑑賞日本現代文学20 中原中也』角川書店）。

【少年時】は、主として「白痴群」時代（昭4―昭5）の、九篇の詩より成る。ここではその中の三篇（「少年時」―「寒い夜の自我像」）を収録。「詩人の自覚を強調する軸」と「絶望、喪失、悔恨の軸とが交錯しながらこのパートを構成している」（吉田熙生、右掲書）。

【みちこ】と【秋】も、主に「白痴群」時代の創作で、共に五篇の詩より成る。ここでは、「みちこ」から二篇（「汚れつちまつた悲しみに……」と「つみびとの歌」）を収録。「自己（無力な保護者）と恋人とを同時に救済する途は「愛」の「幸福」しかない」という「主題を「汚れつちまつた悲しみに……」「更くる夜」「つみびとの歌」の悲しみ、感謝、弁明が伴奏している」（同、右掲書）。

【羊の歌】は、昭和六、七年頃の創作で、三篇より成る。「怠惰」も「倦怠」も、対人関係における意味を失って、自己の感情の奥底に潜む根源的な気分としての位置を与えられる」（同、右掲書）。

(五) 作品本文

初期詩篇

サーカス⁽¹⁾

幾時代かがありまして

茶色い戦争ありました

幾時代かがありまして

冬は疾風吹きました

幾時代かがありまして

今夜此處での一と殷盛り^{ひまか}

今夜此處での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁^{はり}

そこに一つのブランコだ

見えるともないブランコだ

頭倒^(まか)さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋^{やね}のもと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

その近くの白い灯が

安値^{やす}いりボンと息を吐き⁽²⁾

観客様はみな鰯

咽喉^{のんど}が鳴ります牡蠣殻^(かきがら)と

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外^{やがい}は眞ッ闇^{くら} 闇^{くら}の闇^{くら}

夜は劫々^(ごご)と更けまする

落下傘^{らくか}奴^{がき}のノスタルヂアと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

朝の歌⁽³⁾天井に 朱き^{あか}いろいで

戸の隙を 洩れ入る光、

鄙^{びな}びたる 軍樂^{ぐんがく}の憶^{おも}ひ

手にてなす なにごともなし。

小鳥らの うたはきこえず

空⁽⁴⁾は今日 はなだ色らし、倦^うんじてし 人のこころを諫^{いさ}めする なにもものなし。樹脂^{じゆし}の香に 朝は惱まし

うしなひし さまざまのゆめ、

森⁽⁷⁾竝は 風に鳴るかな

ひろごりて たひらかの空、

土手づたひ きえてゆくかな

うつくしき さまざまの夢。

歸郷⁽⁸⁾

柱も庭も乾いてゐる

今日は好い天氣だ

縁の下では蜘蛛^{くも}の巢が

心細さうに揺れてゐる

山では枯木も息を吐く

あゝ今日は好い天氣だ

路傍^{ばた}の草影があどけない愁^{おも}みをするこれが私の故里^{ふるさと}だ

さやかに風も吹いてゐる

心置なく泣かれよと

年増^{としず}婦の低い聲もする

あゝ おまへはなにをして來たのだと……

吹き来る風が私に云ふ

(10)
悲しき朝

河瀬の音が山に来る、

春の光は、石のやうだ。

笕の水は、物語る

白髪(しらぎ)の嫗(きうな)にさも肖(に)てる。

(12)
雲母の口して歌つたよ、

背(うし)ろに倒れ、歌つたよ、

心は涸(かわ)れて皺(しわが)枯れて、

巖(いはは)の上の、綱渡り。

知られざる炎、空にゆき！

響の雨は、濡れ冠る！

.....

(13)
われかにかくに手を拍く……

少年時

(14)
少年時

黝(あせう)い石に夏の日が照りつけ、

庭の地面が、朱色に睡つてゐた。

地平の果に蒸氣が立つて、

世の亡ぶ、兆(きざし)のやうだつた。

麥田には風が低く打ち、

(15)
おぼろで、灰色だつた。

翔(と)びゆく雲の落とす影のやうに、

田の面(おも)を過ぎる、昔の巨人の姿――

夏の日の午過ぎ時刻

誰彼の午睡(ひるね)するとき、

私は野原を走つて行つた……